

| | |
|--------------|---|
| Title | (応答) internalな醤油味の正体がpseudo-realistなソースだからって、so what ? |
| Author(s) | 柴田, 正良 |
| Citation | : 142-144 |
| Issue Date | 1996-08 |
| Type | Book |
| Text version | publisher |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/36536 |
| Right | |

*KURAに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社（学協会）などが有します。

*KURAに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。

*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者（学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど）に権利委託されているコンテンツの利用手続については、各著作権等管理事業者に確認してください。

批判への応答

——internal な警油味の正体が pseudo-realist なソースだったからって, so what?

柴田正良

真理・実在・知識, というトリアードが無邪気に支える幸せの国の住人からの批判は, この国の湿っぽい (哲学) 業界では滅多にお目にかかれない代物なので, それを自説の解説の機会に利用できるということをまず戸田山に感謝したい。

1. 戸田山は, 「アイダホの州都がボイジーであるということ」という目下使い道のない知識がデータベースのように蓄積される, という直観を反例に持ち出す, これは, 関係概念としての知識という考え方 (つまりそうした直観への挑戦) に対する反論までにはなっていない。戸田山は残念ながら, 単なるデータベースは知識ではない, という第3節「スキルと因果概念としての知識」での私の議論を見逃しているようだ。「アイダホの州都がボイジーであるということ」という同一タイプの言語表現で示される信念は, それが適切に使用される文脈では知識であり, そうでない文脈では知識ではない。カズヒサが得た信念は, 彼が州知事を表敬訪問するというありそうもない (暗れがましい?) 機会が実現するまでは知識ではなく, 知識の予備軍に留まる。関係概念 (としての知識) という描像からすれば, 可能な状況において目の前の白磁の壺が殺人に使われるからといって, 「いまアヤメの活けられているその壺は凶器である」と言う必要がないのは明らかだろう。戸田山はどこまで実体論的知識概念に縛られているのか。

2. 戸田山は, 私に信念知を「真であることから免除」させたがっているようだが, それはすでに 124 頁注 4) からして誤解である。そこで述べたように「偽であると判明している信念」は知識ではありえない。時としてわれわれは「真である」といまだ判明していない (それゆえ偽であるとも判明していない) 信念を, 「真であると見込んで」用いる。確かにそれが科学的知識の場合, 自分の念頭にあったのが「パトナムによる真理の特徴づけ」との関連である, ということを明言しなかったのは私の落ち度である。パトナムによれば, 真理とは「理想化された合理的受容可能性 idealized rational acceptability」であり, 私もそれにコミットす

る (Putnam 1981)。しかしこの基準を用いてすら、現在のどの科学理論も真とはいえない。というのも誰が、われわれの現在の認識的状况を「理想化された正当化状況」だと言うだろうか。私の狙いは、知識という権利主張の正当性をパトナムの「真」よりさらに手前で保証することである。それゆえ「真の超越的な」見込みを拒絶するがゆえに、知識主張の「真であると判明することからの免除」が必要なのである。

3. 「豚カツと醤油とソース」の仮説は、パトナムの「水槽の中の脳」のような形而上学的実在論にコミットしていないので、どうにも迫力不足で情けない (Putnam 1981)。要するに私が自分にとって認識的に最善と思われる立場（それはこの仮説が本当らしいなら X 機関の立場）に立つ限り、問題はごく経験的な「誤りの気づき」もしくは「誤りの指摘」に尽きる。この仮説が本当だということを誰かが私に教えてくれたなら、私は自分の食べていたものが、醤油ではなくソースをかけた豚カツであったことを認め、「自分はこれまで豚カツにかけていたのが醤油だと知っていると思っていた」と言うだろう（もっとも私はそれでも一人のとき醤油味のする豚カツが食べたいので依然として「醤油と私に見えるもの」をかけるだろう。私は「X 機関がしかじかなので、醤油味の豚カツを食べたいときは豚カツにく醤油と私に見えるもの」をかけるべきだ」ということを知っているのである）。他方、私が X 機関の存在など何も知らないとしてみよう（そしてこれは、私やあなたがいつもの事柄に関していつもの状況にあるということである）。このとき、誰が「豚カツと醤油とソース」の仮説のことなどをウジウジと悩むだろう。このときこそ、「私は自分が豚カツに醤油をかけているのを知っている」とすがすがしく言い放つべきなのだ。

4. 豚カツの仮説で私に対する反論が構成できると戸田山が見誤ったのは、「自分たちの認識論的状况の限界内に留まろう」という私の主張を彼がよく理解していないからである。これは、無視点的な立場から都合のいい相対主義的な診断をそのつど下そう、といったこの国によくある話ではまったくない。私もずぶの素人として戸田山と同じ程度には現代科学にコミットしている。だからフロギストン説は誤りだと思っており、したがって「その当時の彼らは燃焼が何であるかを知っていると思っただけだ」と言い、さらに私は「しかし彼らがその当時そういう知識主張をしたのは正しかった」と言うだろう。だから私が仮に彼らに他ならないなら、「私は燃焼が何であるかを知っている」と言って私はフロギストン

説を述べるだろう。しかしもちろん、私は1996年の日本に住む人間である。私は自分にとって認識論的に最善と思われるこの立場から自分の知識主張を行い、他人の知識主張を評価する。それゆえに「自分たちの認識論的状況の限界内に留まる」ことは、狂信者の集団に対して無批判的に「知識」を認めてやることを含意しない。なぜならわれわれは自分たちの知識にコミットしているからである。ただわれわれは、戸田山のように「超越的な立場」を詐称して真理の「超越的な保持」をやたらに振りかざしたりはしない。真偽の決着に原理的な困難があるように思われる場面で「真」の名の下に人を殺戮するのは、それこそ「味の分かる」われわれ大人の理性が克服すべき狂信の一種であろう。相手を粉碎するのは「真」という御旗だけではない。われわれの「生き方のよさ」や「趣味のよさ」こそが、じっくりとではあっても確実に、子供っぽい狂信の力を無にすることができるのである。